

【シンポジウム：サラワクから見るマレーシア研究】

サラワクのロングハウス社会におけるインドネシア人移住者との共住

加藤裕美

はじめに——マレーシアにおけるインドネシア人の増加

近年、マレーシア・サラワク州の内陸部において、インドネシア人の増加が顕著に見られるようになった。これまでも、多くのインドネシア人が木材伐採キャンプなどでの労働に従事してきたことはよく知られているが、彼らはサラワクの在地社会の人々と関係を築くことは限られていた。ところが、近年アブラヤシ・プランテーションで多数のインドネシア人が雇用されるのに伴って、そこから別の職業についたり、内陸部の先住民に雇われたりして、ロングハウスに暮らすインドネシア人が増えつつある。本稿では、サラワクの内陸部のロングハウスに暮らすインドネシア人に焦点を当て、彼らがどのような経緯でロングハウスに住み、どのようにロングハウスの人々と社会関係を築いているのかを考察する。

マレーシアでは、植民地期以前から近隣諸国との往来が盛んであった。特に経済的に発展した 1980 年代以降は、マレーシア国内での労働力の需要により、インドネシアやフィリピンからマレーシアへの労働移動が広く見られるようになった。政府の統計によると、1991 年には約 80 万人いた外国人労働者は、2000 年には約 138 万人に増え、2010 年には約 232 万人にも上っている (Department of Statistics Malaysia, 1992, 2001, 2011)。

マレーシアに滞在する外国人労働者のうち、出身国別ではインドネシアが最も多く 44% を占めている。次いでネパールが 17%、バングラデッシュが 15%、ミャンマーが 8% となっている。外国人労働者の就業先としては、業種別に最も多いのは、製造業が全体の 35% を占め、次いで建設業が 20%、プランテーションが 16%、サービス業が 12%、家事が 9%、農業が 8% を占めている。さらに、公的な統計資料に表れない非合法滞在の外国人労働者も含めるとその数は相当な人数となることが、マレーシア国内でも認識されている。

サラワクでの登録外国人は、2000 年に約 6 万人で (Department of Statistics Malaysia, 2001)、非合法の滞在者を合わせても 10 万人前後にとどまっていたと思われる。しかし、その後 10 年の間で、登録外国人数は 117,092 人 (Department of Statistics Malaysia Sarawak 2015) にまで増えた。そして、非合法のインドネシア人労働者がその 3 倍存在

するという新聞報道までなされている (Borneo Post 13, March, 2015)。一部の非合法のインドネシア人は、国境付近の非合法プランテーションで就業していると考えられるものの、近年、内陸のロングハウスに暮らすインドネシア人も増えている。本稿で対象とするカピット省ブラガにおいても、建設業や運搬業に携わるインドネシア人の男性が数多く存在する。ブラガ町で、食堂や商店の販売員として働くのは、多くがインドネシア人の女性である。地域社会の中にインドネシア人が暮らすことが当たり前の状況となっている。なかにはサラワクの人と結婚し、インドネシア人がロングハウスに住むことが日常的となっている。そこで問題となるのは、こうし非合法滞在のインドネシア人がどのように地域社会で生活をし、どのように在地の人々と関わっているのかということである。

マレーシアの移民に関する先行研究では、19 世紀からのインド系移民や中国系移民を半島部のゴム・プランテーションや錫鉱山の労働者として受入れた状況を扱う研究がある。こうした研究では、同郷会の意義や出身地の地縁ネットワークの重要性、家族や親族の呼び寄せによる連鎖的な移住が指摘されてきた。近年みられるプランテーション会社でのインドネシア人雇用に関する研究では、外国人労働者の制度的政策的分析が行われている (Stahl, 1999, Riwan, 2004, Ford, 2006)。また、外国人労働者への懸念や非合法就労への対策について指摘されてきた (Pilai, 1994, Liow, 2003, Castls, 2004, Pyeet. al, 2012)。

一方、インドネシア人移民労働者に関する研究では、台湾や香港、サウジアラビアで働く女性の家事労働者に関する研究がおこなわれている (Loveband, 2004, Silvey, 2006, 澤井, 2016)。こうした研究では、インドネシア人女性家事労働者の一部が富を蓄積し、成功者として村に帰郷するものの、雇用者から不当に扱われたり、犯罪に巻き込まれたりする危険性もあることを指摘している。サラワクの内陸社会においては、言語がインドネシア語と通じ合えることも相まって、雇用者と労働者という経済的關係では一括りにできない関係が存在する。なかにはロングハウスに住み込み何十年も故郷に帰らない人がいるなど、異なる状況がみられる。

こうしたサラワクのロングハウス社会の特徴に関する先行研究では、親族関係によって緩やかに繋がる人々がロングハウスに集まって住んでいるものの、多様な背景を持った人々を取り込んできたことが指摘されている (Metcalf, 2010)。そこで、本稿は、サラワクのロングハウス社会に入り込んで暮らす 6 人のインドネシア人に着目し、彼らの在地社会とのかかわり方について記述する。そして、ロングハウスに住むなかで、日々村人とどのような社会関係を築いているのかを考察する。

以下では、筆者が 2004 年からカピット省ブラガ郡の S 村で行ってきた情報をもとに、次のような構成で議論を進める。まず I で、調査対象とした S 村の婚姻関係に着目し、S 村にはどのように多様な背景を持った人たちが暮らしているのかを記述する。II では、S 村に暮らす 6 人のインドネシア人の事例を取り上げ、彼らがどういった経緯で S 村に暮らし、ロングハウスの村人とどのような関係を築いているのかを個別に記述する。その上

でⅢにおいて、非合法滞在のインドネシア人がロングハウス社会で暮らしやすい社会的な背景について考察し、Ⅳで S 村にインドネシア人が暮らすことによる、S 村の人々との社会関係の動態について考察する。最後に、マレーシアにおいてインドネシア人の増加という現象が、サラワクのロングハウス社会というマイクロな世界において、どのような人と人との交渉が織りなされているのかを提示する。

I. 外部者を取り込むロングハウス社会——S 村を構成する人々

S 村は、ラジャン川の上流に位置する、人口約 240 人の村である (図 1)。表 1 は、ブラガ郡の人口構成を示している。この地域のマジョリティは、カヤンやクニヤ、シカパンやクジャマンなど、長年焼畑農耕を行ってきた階層性社会¹の人々であり、バルイ川とブラガ川という両河川沿いにロングハウスを建てて暮らしている。より上流域には定住した狩猟民のプナンが暮らしている。こうした人々の多くがキリスト教徒であり、S 村の人々も同じくキリスト教を信仰している。ブラガ郡の中心であるブラガ町にはマレー人や華人

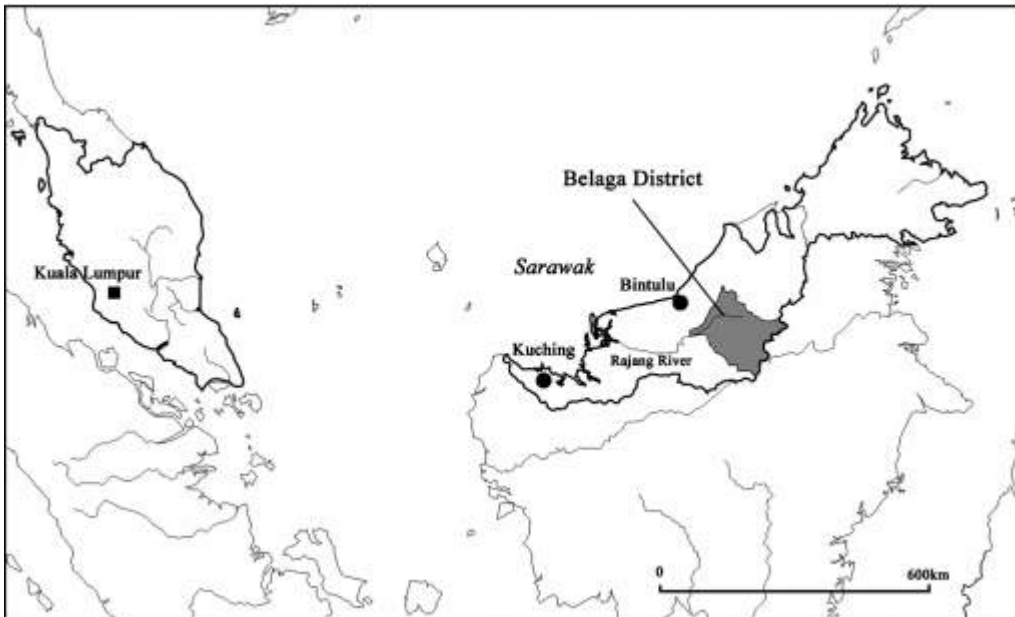


図 1. ブラガの位置

(出所) 筆者作成

¹ 階層性社会 (stratified society) では、首長 (maren) を頂点に、貴族層 (hipuy)、平民層 (panyi)、そしてかつては奴隷層 (dipen) が存在した。サラワクでは、ブルック統治以降、奴隷層が禁止されている [Rousseau1990]。各層の名称は、民族集団によって異なる。

表 1. ブラガ郡における民族集団別村落数と人口

民族集団名	村落数	人口
Kenyah	16	9,073
Kayan	16	7,104
Penan	25	2,820
Punan Bah	5	1,457
Sekapan	2	1,085
Kejaman	2	962
Malay	2	820
Lahanan	2	758
Ukit(Bhuket)	1	518
Seping	3	470
Chinese	1	400
Sihan	1	240
Tanjong	1	179
Iban	1	156
Total	78	26042

(出所) PejabatDaerahBelga2015 に基づき筆者作成

などもおり、様々な民族集団が暮らす地域である。インドネシア人は、この地域における伐採会社やプランテーション会社、ブラガ町の商店、あるいは在地の人々のアブラヤシ栽培やゴム植栽、農地伐開、小間使いなどに雇われ、散在して暮らしている。

S村の人々は、プナンと同じく、歴史的には遊動狩猟採集を行ってきた人たちである。20世紀半ばに焼畑耕作を始め、ロングハウスに住み始めるようになった。この地域でマジョリティである、カヤンやクニャなど階層性社会を持つ人々は、首長層 (*maren/paren*) の統率力が強く、婚姻や土地利用など、村落社会での慣習法 (*adet*) が厳しく定められているのに対し、S村では、こうした首長層がおらず平等主義的な人々である。そのため、村長の統率力は弱く、慣習法による決まりが厳しくない点で異なる。

サラワクのロングハウス社会は、Metcalf (2010) が指摘するように、親族関係によって緩やかな紐帯がみられるものの、異なる出自の人々も存在する。S村においても同様に、シハンという民族集団のほかに、イバン、プナン、華人、マレー、カヤン、クジャマン、ブカタン、クニャ、ラハナン、ビダユー、クラビット、シカパン、そして、インドネシア人など、様々な出自の人が S村の人と結婚をして暮らしている²。S村の人々は、歴史的にも古くから他民族集団との婚姻がみられた。19世紀後半には、ルガットやブケット、ブカタンなどとの婚姻関係があり、20世紀前半にはシカパン、カヤン、イバンとの婚姻関係がみられた。そして 20世紀半ばになるとプナン、特にプナン・ブラガン³との婚姻

² S村の人々は、この地域に暮らす多くの民族集団と同様に双系社会である。両親が異なる民族集団の場合、両方の出自を認め、父母どちらの出身村にも住むことができる。

³ プナン・ブラガン (Penan Belangan) はプナン・タルン (Penan Talun) とも呼ばれる。

が増えた。そのほか、少数ながら、クジャマンやラハナン、クニヤとの婚姻関係もみられた。さらに、1990年以降は、内陸部で伐採業が盛んになり、伐採会社で働く遠方出身のイバンやインドネシア人との婚姻も見られるようになった。そして、現在では都市への出稼ぎに行く若者が増えたため、都市部の華人やマレー人など、より多様な地域出身の人々と婚姻関係がみられており、現在の S 村では様々な出自を持った人々が共存している。

S 村の人々は婚姻を通して、他民族集団の人々と共住してきた以外にも、時に全く血縁関係のない人々が S 村で暮らすこともあった。例えば、20 世紀前半には、イバンとの戦闘へ行く途中のブケットが、短期間 S 村に滞在することがあった。20 世紀半ばにはプナンの家族が S 村で暮らし、その子ども達が全員 S 村の人と結婚した。さらに、クジャマン、シカパンの家族が S 村の人と一緒に焼畑稲作をして暮らすこともあった。このように S 村では、婚姻による社会関係以外にも、まったく姻戚関係にない人が村に滞在することがかつてからみられた。

それは、筆者が調査をしていた 2000 年代にも観察された。調査のために滞在をしていた家族では、ある時全く血縁関係のないシカパンの男性がやってきて数か月一緒に暮らし、焼畑稲作や狩猟や漁労を一緒に行ったことがあった。また別の時には、娘の元夫のインドネシア人がやってきて娘の父母と数週間同居したこともあった。別のインドネシア人の青年が S 村の青年と一緒に暮らし、焼畑稲作や狩猟、漁労などを一緒に行うこともあった。さらに、村内の別の世帯では、フィリピン人女性を養子にし、フィリピン人の夫妻と子どもの 3 人が同居する世帯もあった。そして現在では、不当な扱いを受け逃げてきたインドネシア人の女性をかくまっている世帯もある。このように、血縁関係のない外部者を受け入れ、共住する状況は、歴史的にも現在においても頻繁にみられ、外部者を受け入れやすい空間であるといえる。以下では S 村に暮らす 6 人のインドネシア人の事例を紹介し、彼らがどのように S 村に住みはじめ、村の人々とどのような関係を築いているのかを記述する。

II. ロングハウスで生活をするインドネシア人

ここでは、S 村に住む 6 人のインドネシア人の事例を取り上げ、彼らがどういった経緯でサラワクに来て、どのように S 村に住むようになったのか、そして現在 S 村でどのような生活をし、村人とどのような社会関係を築いているのかについて述べる。

事例 1 PK さん—ジャワ島出身、42 歳、男性

PK さんは、2002 年にサラワクに入りブラガヤバクンの伐採キャンプで働いていた。2005 年に S 村の女性 BT さん（当時 37 歳）が伐採キャンプにラタンを採集しに行ったこ

とがきっかけで知り合った。BT さんは 3 度の離婚歴があり、6 人の子ども⁴がいるが、PK さんと知り合った当時、配偶者はいなかった。初めは、BT さんが伐採キャンプに住み込み同居をしていたが、次第に PK さんは、BT さんの未婚の子ども 4 人と母、弟と同居をする形でロングハウスに住み始めた。当初、インドネシア語とマレーシア語を介して会話をしていたが、現在は S 村の言語を流暢に話している。

普段、PK さんはブラガ町の華人やマレー人に雇われて家の建築や補修の仕事を行っている。それ以外に村人と一緒に漁労をおこなったり、BT さんの世帯のメンバーとして稲作の労働交換に参加したりすることもある。また、時にはムルム・ダム建設や小学校建設のコントラクトを下請けし、S 村の人々を雇うこともある。しかし、S 村の人を雇う際にも、村人に食事や酒をふるまうことはしない。お金がある人は飲食を提供するべきという、S 村の人々の期待に背く行動を行うこともあり、そのことは、時に S 村の人々が違和感を覚えることにもなっている。

ムスリムであるため、PK さんは BT さんの家族と食事を共にすることはなく、一人で別の食事をとる。この行動は、自分が食事をしているときには、食事をしていない他の家族にも声をかけるべきと考える、S 村の人々の慣習とは異なり、家族から「ケチである *makot*」という評価を付されることもある。また、PK さんが働いて、BT さんに生活費を渡しているときは、BT さんの家族は誰も不満を言わないが、働かないで居候する状態が長く続くと、家族が不満を漏らしたり、インドネシアに妻子がいて送金をしているのではないかという憶測を生んだりすることもある。しかし、最終的には BT さん本人が好んでいるため、家族が強く介入することはない。

有効なビザを所有していないため、PK さんは病気やけがをした際には政府のクリニックを受診することができない。そのため、ブラガ町の華人商店で売っている市販薬を服用したり、ビントゥルやシブの薬局から薬を買ってもらったりして対応せざるを得ない。

2015 年には、PK さんが S 村の 10 代の女性と浮気をするという騒動があった。その時 PK さんは BT さんの娘と激しい口論になり BT さんの家に住みづらくなった。その際、親しくしている S 村の別の家族の世話になり数週間暮らした。ほとぼりが冷めた頃に再び BT さんとの同居を始めた。この事例が示しているのは、同居しているロングハウスの家族との関係を大切にしているものの、その家族との関係が心もとなくなった際には、S 村の別の世帯に居候をさせてもらうことが可能だということだ。

PK さんは、インドネシアの家族ともたまに電話で話をしており、2016 年には 2 週間ほど一時帰国をして、パスポートを再発行して S 村に戻ってきた。BT さん本人や家族は、PK さんの正式な名前、出身村、家族構成、年齢、来歴、妻子の有無などについては何も知らない。こういった状況から S 村にやって来る人がどこの誰で、どういう来歴の人か

⁴ 6 人の子どものうち、1 人は養子に出し、1 人は養子にした子がいる。

は、あまり問題視されないようである。今後、警察の取り締まりが厳しくなれば、PKさんはS村に滞在することは難しくなるかもしれない。しかし、BTさんもそれを承知でPKさんと同居をしている。最終的にはBTさん個人の裁量として、BTさんの家族や村人は誰も口をはさむことはない。

事例2 LUさん—東カリマンタン出身、男性、48歳

LUさんはボルネオ島のマレーシアとインドネシアにまたがって居住するクニャという民族集団の出身で、キリスト教徒である。1993年よりバルイ川流域の伐採会社で仕事を始め、1997年にS村のBHさん（当時17歳）と知り合う。BHさんは当時S村出身の別の男性と結婚をし、2人の子どもがいた。しかし、夫が遠方に仕事に行っている間にたまたま村にやってきたLUさんと知り合い、そのまま結婚をした。その後4男を授かる⁵。普段、LUさんはブラガ町の華人に雇われてバイク修理の仕事をしたり、村人と狩猟をしたりして生活をしている。また、ロングハウスでアブラヤシ栽培を行っているほか、焼畑稲作の労働交換に参加することもある。BHさんの両親は、LUさんが働いてBHさんと子どもを養ってくれているので不満はないという。

特徴的なのは、LUさんがマレーシアの国籍を取得している点である。BHさんは、継父の名前で出生証明を作成していたため、LUさんは、BHさんの実父の名前を借りてアイデンティティ・カード（IC）を取得した。二人は後にオラン・ウルの結婚証明書も発行している。

S村の慣習では、村人にバイクを貸すのは、ただで貸すべきところ、LUさんは有料で貸すことがあり、そのことに不満を漏らす村人もいる。特に、マレーシア国籍を取得してからは傲慢（*subung*）になった、と語る村人もいる。LUさんは、S村の人と一緒に狩猟や農業を行うが、家族以外の村人と酒を飲んだり、個人的に親しくしたりすることはみられない。また、S村に滞在する他のインドネシア人や、近隣のクニャと交流することもなく、普段はS村の言語を話しBHさん家族との関係を重視しているようである。

事例3 IAさん—スラウェシ島出身、女性、28歳

IAさんはスラウェシ島のブギス出身のムスリムである。2010年にサラワクのプランテーション会社で就労後、ビザが切れ、2012年よりS村のアブラヤシ栽培の労働者として働くようになった。それと同時期にS村のSEさん（当時28歳）と結婚し2男を授かっている。普段は子どもの面倒をみつつ、料理や洗濯などの家事をしてSEさんの家族とロン

⁵ インドネシア人との間に生まれた子どもでも、マレーシアで出生した場合には、出生証明書が発行され、マレーシア国籍を取得することができる。

グハウスで同居をしている。農作業や村人との労働交換に参加することはない。SE さんの親は、孫を生んでくれて、家事をしてくれるので不満を漏らすことはない。この地域では妻方居住が一般的であるため、結婚後、男性は妻の家族と同居しなければならない。しかしながら、SE さんは引き続き自分の親と同居をできるの点も好んでいるようだ。

S 村の人とは初めはインドネシア語とマレーシア語で会話をしていたが、現在は S 村の言語を流暢に話す。IA さんは、S 村の女性やこの地域にいる他のインドネシア人女性との交流は少なく、同じムスリムである近隣のマレー人との交流もない。SE さん家族との関係を大切にしており、夫が村の若者と一緒に飲食をしたり、散財したりすることを好ましく思っていない。彼女はインドネシアの家族と電話や SNS で連絡は取るものの故郷に帰ったことはないという。いずれは一時帰国をして故郷の家族に子どもの顔を見せたいと語る。

事例 4 IT さん—西カリマンタン出身、男性、27 歳

IT さんは西カリマンタン州サンバス地方出身のムスリムである。2007 年、18 歳の時にサラワクにやってきて各地の建設業で働いた後、ブラガで家を作る仕事をはじめた。初めは、仕事仲間であった S 村の男性と親しくし、よく家に遊びに行っていた。その後、この男性の友人の S 村の別の青年と親しくなり村に寝泊まりをするようになった。この家族と一緒にロングハウスに住み、同世代の青年たちと一緒に漁労や農業、薪木拾い、水汲みをし、町にいるときは村の青年と一緒に賃金労働に従事した。彼はムスリムであるので、豚肉は食べないが、それ以外は村人が出した料理と一緒に食べた。また、彼は S 村の言語を習得していなかったため、村人とはインドネシア語とマレーシア語で会話をしたがコミュニケーションには問題はない。IT さんは、常に S 村の青年と一緒に行動をしており、彼がロングハウスに同居をしていることに対して、青年の家族はおろか、他の村人の誰も文句を言う人はいない。IT さんが高熱を出した時には、受け入れの家族が市販薬を与えて介抱をしていた。IT さんは、S 村のロングハウスに約 3 か月住んだあと、別の仕事を求めてこの村を離れていった。現在は、近隣のシカパンの村に住んでおり、いまでもたまにブラガの町で S 村の青年と会うそうである。

事例 5 JK さん—ジャワ島出身、男性、30 代

JK さんは、1995 年にサラワクへやってきて、バクンダム建設の仕事に携わっていた。当時バクンダムの食堂で働いていた、この村の女性 UP さん（当時 16 歳）と知り合い 1998 年に結婚する。女性の家族と一緒にロングハウスに同居していた。しかし、JK さんは大変嫉妬深く、UP さんが一人で森に食材を探しに行ったのに嫉妬をして山刀を使って

自殺をすると騒いだことがあった。この騒動を恐れた別の村人が警察に通報し、不意に非合法滞在が発覚してしまい、インドネシアに強制送還された。JKさんが帰国中の1999年に、女性はJKさんの子どもを出産した。その後女性はブラガ出身のプーナ・バー⁶の男性と再婚をした。JKさんは新しいパスポートを発行し、2004年に再びS村に戻ってきた。しかし、UPさんはすでに再婚し、子どもを産んでいたため、JKさんは彼女の両親や、事例1のBTさんのところ、S村の別の家に数週間滞在した後、ブラガを去っていった。その後、JKさんがサラワクの別の場所で滞在しているのか、インドネシアに帰国したのかは不明である。JKさんとUPさんの子どもはUPさんの再婚相手のプーナ・バーの男性の名前で出生証明を発行しており、ICもある。現在は、UPさんの3度目の結婚相手であるイバンの男性と同居をしてS村で暮らしている。

事例6 ORさん—ジャワ島出身、女性、19歳

ORさんは、ジャワ島出身のマドゥーラの女性でムスリムである。2016年に就労エージェントを通してサラワクにやってきて、ブラガにある華人商店で働いていた。ある時、この商店によく買い物に来る、インドネシア人の男性と知り合いになった。この男性はブラガのカヤンの警察官のもとでゴム植栽の仕事をしていた。買い物に来たこのインドネシア人の男性から、別に給料の良い仕事があると誘われ、騙されそうになるところをS村に逃げてきた。同じ華人商店で働いていたORさんの友人のインドネシア人の女性の恋人であった、S村の男性LDさんを頼って逃げてきた。現在は、LDさんの家族と同居をして、洗濯や料理などの家事を手伝っている。S村の人からは、働き者で家事をよくすると評判だ。ORさんは元の仕事の契約期間が終わっていないので、エージェントに見つかってはならないという。また、騙したインドネシア人の男性に見つかることを恐れて、家から出ることはほとんどない。普段は家の軒先でS村の女性と一緒に談笑をしたりビーズ製品を作ったりしている。LDさん家族やS村の人とはインドネシア語とマレーシア語を介して会話をしている。ORさんは同じS村にいるインドネシア人どうして、インドネシア語で話をすることはない。華人商店で働く友人のインドネシア人の女性が訪れてきて、頻繁に情報交換をしている。今後ORさんが、いつまでLDさんの家に住むのか、インドネシアに帰るのかは不明である。

III. 外部者を受け入れやすいロングハウス社会の背景

上述のように、S村には様々なインドネシア人が共住している。ここでは、ロングハウ

⁶ プーナ・バー (Punan Bah) はブラガに居住する民族集団である。

ス社会においてインドネシア人を受け入れやすい背景について考察したい。インドネシア人を受け入れやすい背景には、まず内陸部全体におけるインドネシア人人口の増加があげられる。これまでも伐採会社などで働くインドネシア人はいたが、特に 2000 年代以降は、プランテーションの拡大によって多数のインドネシア人が雇用されている。それ以外にも、製造業や建設業、サービス業に従事するインドネシア人が多数おり、日常生活においてインドネシア人が存在することが当たり前の状況となっている。多くのインドネシア人は労働者用の宿舎に集団で居住しているが、なかには、本稿で取り上げたように、ロングハウスに個人でやってきて住むインドネシア人も現れ始めている。

インドネシア人たちがロングハウスに暮らすようになる最大の理由は、ロングハウスにおける住みやすさであろう。ブラガ郡は都市部からは遠く、インドネシアとの国境に接した地域である。都市部では、幹線道路などで非合法滞在者への取り締まりが厳しいのに対し、内陸部ではロングハウスが河川沿いに点在しており、こうした村落で取り締まりが行われることはほとんどない。つまり、非合法滞在をしているインドネシア人にとってロングハウスは住みやすいシェルターのような役割がある。家賃は不要であり、村人について農業や漁労や採集をすれば、食べ物に困ることはない。また、ロングハウスの住民やブラガ町の華人、マレー人などのもので賃金労働が可能であり、就労先がたくさんある。そのため、空間的に囲われた伐採キャンプやプランテーションでの宿舎に比べて、より自由で柔軟な生活が可能である。さらにサラワクの在地家族の支援があれば、LU さんのようにマレーシア国籍を取得することも可能である。

こうしたサラワク内陸部の事情に加え、S 村独自の事情もインドネシア人がロングハウスに住みやすい状況を作っていると考えられる。S 村の人々は先述したように、かつてからブカタンやブナン、ブケット、シカパン、クジャマンなど、近隣の民族集団の人々を受け入れ、一時的に共住することがあった。この地域の慣習では一緒に生業活動をおこなえば同じ分だけ分け前がもらえるので、一時滞在者に食費や宿泊費などの金銭を要求することはない。

また、カヤンやクニャなどの首長 (*maren/paren*) を頂点とする階層性社会とは異なり、S 村の人々はバンドを中心にした遊動生活を送ってきた。そのため村落組織としてのロングハウスの統率が弱く、個人や家族の自律性を尊重する傾向にある。村長は外部者を認識しているが干渉はせず、個人や世帯の裁量に任せて、介入はしない。だからといって、外部の短期滞在者を無視したり、拒絶したりすることもなく、共住者として一緒に焼畑稲作や狩猟をおこなっている。時に警察の取り締まり情報などがあれば、村人はインドネシア人たちに教えて、ロングハウスに留まるよう勧めたりもしている。

ロングハウスの各世帯においても同様に、村の若者と友人のインドネシア人や、IT さん、OR さん、PK さんのように泊るところがないインドネシア人を拒んだりすることはない。JK さんのように極端に村の慣習に逸脱する行為を行うと問題になる場合もあるが、

多くはたとえ働かずに居候を続けたとしても「怠け者だ (*jokwat*)」という不満が漏れる程度で済み、それが追い払われる理由にはならない。

さらに、S村の婚姻をめぐる慣習にも、近隣の階層性社会の民族集団とは異なり、外部者を受け入れやすい背景があると考えられる。S村では、婚姻をめぐる慣習法が厳しくないため、事実婚、あるいは妊娠が発覚してから結婚をする例が多い。そのため短期の結婚や離婚も多い。男性から女性への婚資の支払いは義務ではなく、結婚式や饗宴をひらいて村人全員に披露することも珍しい。村長に個別に報告することで済ませる人が多い。そのため、UPさんのように子どもが生まれた後で結婚に至らなかったとしても、あまり問題視されない。未婚の母の姉妹や母方の従姉妹が養子とすることで解決する。一方でカヤンやクニヤ、シカパン、クジャマンなどこの地域のマジョリティの民族集団においては、婚資の支払いを要求され、特に未婚のまま妊娠をした際には高額な賠償金を要求される。また、披露宴を行うことが一般的であり、饗宴のための経済的な負担が大きい。このような状況は近隣の民族集団に比べて特にS村においてインドネシア人が共住しやすい条件となっているであろう⁷。

S村において外部者やインドネシア人を受け入れやすい背景のもう一つには、養子 (*amung*) や擬制的親族 (*penyamo*) の慣習があることであろう。幼少期の育ちの悪さや妊娠中に離婚したといった理由により、子どもを養子にだすことはよくある。また同様に、夢見や結婚後に子どもができないといった理由で養子をもらうこともよくある。養子には、名目的な養子から、出生証明やアイデンティティ・カードまでを変更する実質的な養子まで幅広くみられる。BTさんの事例のように、S村においてはおよそ1家族に1人は養子関係のある人がいる。同様に夢見によって血縁関係にない者同士が擬制的兄弟や姉妹になることも多い。こうした養子や擬制的親族の慣習によって、ITさんやORさんのように血縁関係や姻戚関係にない若者の面倒を見ることは自然におこなわれる。S村のこのような背景も、短期滞在のインドネシア人が住みやすい状況となっている。

IV. インドネシア人と暮らすことによるS村の社会関係の動態

ここでは、インドネシア人と共住することが、S村の人々の社会関係にどのような意味をもたらすのかを考察したい。ロングハウスに滞在するインドネシア人に対して、S村の人々は個人や世帯の自由として不干渉な場合が多いが、村人からインドネシア人に向けて聞かれる不満の多くは個人主義 (*mek arop arop*) あるいは、ケチ (*makot*) というものがある。例えば、S村の人々は、インドネシア人が共食やモノの共有、飲食の提供、時間

⁷ S村の人の話によると、S村と婚姻の慣習が似ているより内陸部のプナンの村においてもS村と同様に多数のインドネシア人が村に居住しているという。

や空間の共有をしないことに対して、否定的な評価をすることがある。こういった悪評には嫉妬が含まれることもあり、特に PK さん、LU さん、AL さんなど S 村の人と結婚をしているインドネシア人に対して聞かれた。同じ行動を、S 村の人が行くと「親族を捨てた」とより厳しい評価を受ける。しかし、インドネシア人に対しては、個人主義的であると言いつつも、ある程度は異なる背景を持つ人々として許容することが多く、最終的にはインドネシア人を受け入れる個人や家族の自律性に任せている。

インドネシア人が S 村の人々の社会関係に与える影響としてはモノや富の分かち合いという平準化作用の圧力からの解放という点があげられる。インドネシア人と暮らす家族は、「自分たちとは異なる人だから」という論理を使いコミュニティの平準化作用を回避する力が働く。S 村の女性が同じ村の男性と結婚したがる理由の一つに、この平準化作用によって村人に酒をふるまい、酔っぱらい散財する機会が増えるということがよく聞かれる。それに対して、インドネシア人男性が夫の場合、S 村に夫の親族がいないため、稼いだお金を自分の家族だけに費やしてくれる。もし、同じ村出身の夫だったら、夫の親族や友人に、お酒や食べ物をふるまう機会が増え散財してしまう。S 村の女性からすると、インドネシア人の夫にはモノや食べ物、時間や空間などを他の村人と共有するのではなくて、自分の家族とだけ共有してもらいたいという思いがあるようである。

インドネシア人にとって、S 村の人と結婚をし、新たな家族関係を築くことは S 村のコミュニティのメンバーとしてかかわる入り口となる。一方で、インドネシア人と結婚した S 村の男性あるいは女性というのは、彼らが他の村人と仲良くするよりも、自分の家族とだけ、お金や物を共有してほしいと望む。このようにして、インドネシア人との共住を通して、村のなかの平準化作用からの脱却を望む一面もみうけられる。

一方で、S 村に居住するインドネシア人の立場から考えると、村人と社会関係を築くことにどのような主体性がみられるのであろうか。これは、未婚者と既婚者でその対応が異なるようである。S 村の人と婚姻関係がある場合は、受け入れてくれる家族との関係が第一である。そのため、特に他の村人に飲食をふるまったり、集まったりして積極的に社会関係を築こうとしている様子は見受けられなかった。一方で婚姻関係にはない場合は、とくに親しくしてくれる村人との関係が大事である。IT さんのように、受け入れ家族との関係を大切にしつつも、村の若者と分け隔てなく付き合う事例もある。どちらの場合でも、S 村に暮らすインドネシア人どうしで、集まったりインドネシア語で談笑をしたりして、積極的にネットワークを構築しようとしている事例が見られなかった。インドネシア人の立場から考えると、社会関係を受け入れ家族だけに狭めてしまうのはリスクもあるのではないかと考えられる。しかし、インドネシア人同士で集まるよりも在地の家族といかに居心地の良い生活を送るかを重視しているようである。

おわりに

国境を越えたグローバルな人の移動は全世界で見られる現象であり、今後もその状況が進展していくと考えられる。マレーシアにおいても例外ではなく、恒常的な労働力不足から外国人労働力への依存が高まり、特に近年インドネシア人の増加は目覚ましい。本稿では、その結果サラワクの内陸社会に入り込みロングハウスに住むようになったインドネシア人について取り上げ、新しい家族を形成していく過程について記述してきた。そこで明らかになったのは以下の点である。

まず、インドネシア人自身のセキュリティの問題や、内陸部のロングハウスの事情によって、非合法滞在のインドネシア人労働者がロングハウスに住みやすい状況となっているということである。そして、S村の場合で言えば、S村出身の人とではなく、インドネシア人をはじめとする外部者の存在によって村内の平準化作用から抜け出したいと望むS村の人々の心理的様相も見られた。ロングハウス社会の外部や周縁に位置づけられてきた外国人労働者はS村の婚姻関係においては重要な存在となっている。また、インドネシア人自身もインドネシア人同士のネットワークに頼るよりは、自分の不安定な立場を守ってくれる新しい家族との関係を重視しているようである。

別の観点から述べると、個々人でロングハウス社会に入り込んでいくインドネシア人は常にリスクと隣り合わせでもある。まず一つ目にパスポートをめぐる問題である。現在、サラワクの都市部や幹線道路では、非合法滞在のインドネシア人に対する取り締まりが厳しくなっている。今後マレーシア政府が非合法滞在外国人の摘発を強化すれば、彼らはサラワクに滞在することが難しくなるかもしれない。二つ目に医療の問題である。有効なビザを持っていないインドネシア人は、政府の診療所を受診することができない。そのため、在地の家族の支援によって伝統医療や市販薬により治療を受けることになる。多くの場合は、こうした治療で問題ないが、高度な医療が必要になった場合には受診が困難となる。

インドネシア人の滞在をめぐるには上記のような様々な問題が存在するものの、サラワクの内陸社会、特に上流域では、本稿の事例が示したように、インドネシアの故郷を離れサラワクで新しい家族とともに生活をするインドネシア人が、ほとんどどの村にも存在する。彼らを送り出した故郷の家族がこの現象をどう捉えているのかは、現段階では知ることにはできない。しかし、現実問題として、住み慣れたインドネシアを離れサラワクという新天地において第二の家族を得て、第二の人生を繰り広げいく人々が多数存在している。本稿で提示したのは、閉鎖的で静的なロングハウス社会像ではなく、こうしたさまざま背景を持った人たちを取り込み、混ざり合い、ある意味混沌としたロングハウス社会のありかたである。それは様々な個人の生が交差し、時に共同体との距離を離したり縮めたりしながら、共同性を模索していくロングハウス社会の様相である。

〈参考文献〉

日本語文献

澤井志保 (2006) 『『イェムじゃない』—香港で働くインドネシア人家事労働者の「つながり
の平等」による主体性—』『東南アジア研究』第 53 卷 2 号: 244-278。

英語文献

Borneo Post (2015) Borneo Post 13, March, 2015

Castles, S. (2004) The Myth of the Controllability of Difference: Labour Migration, Transnational Communities and State Strategies in the Asia-Pacific Region. In *Perspectives on Transnationalism in the Asia-Pacific*, edited by Yeoh, B. S. A. ; and Willis, K., pp. 16-36. London: Routledge.

Department of Statistics Malaysia (2001) *Population & Housing Census of Malaysia 2000*. Kuala Lumpur: Department of Statistics Malaysia.

Department of Statistics Malaysia (2011) *Population & Housing Census of Malaysia 2010*. Kuala Lumpur: Department of Statistics Malaysia.

Department of Statistics Malaysia Sarawak (2015) *Yearbook of Statistics, Sarawak 2014*. Kuching: Department of Statistics Malaysia Sarawak.

Ford, M. (2006) After Nunukan: The Regulation of Indonesian Migration to Malaysia. In *Mobility, Labour Migration and Border Controls in Asia*, edited by Kaur, A. ; and Metcalfe, I., pp. 228-247. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Liow, J. (2003) Malaysia's Illegal Indonesian Migrant Labour Problem: In Search of Solutions. *Contemporary Southeast Asia* 25 (1) : 44-64.

Loveband, A. (2004) Positioning the Product: Indonesian Migrant Women Workers in Taiwan. *Journal of Contemporary Asia* 34 (3) : 336-348.

Metcalfe, P. (2010) . *The life of the longhouse: an archaeology of ethnicity*. Cambridge University Press.

Pillai, P. (1999) The Malaysian State's Response to Migration. *Sojourn* 14 (1) : 178-197

Pye, O., Daud, R.; Harmono, Y., and Tatat (2012) *Precarious Lives: Transnational Biographies of Migrant Oil Palm Workers*. Asia Pacific Viewpoint 53 (3) : 330-342.

Riwanto, T. (2004) Cross-border Migration in Indonesia and The Nunukan Tragedy. In *International Migration in Southeast Asia*, edited by Ananta, A.; and Arifin, E. N., pp. 310-330. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Rousseau, J. (1990) *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*. Clarendon Press.

Silvey, R. (2006) Consuming the transnational family: Indonesian migrant domestic

workers to Saudi Arabia. *Global Networks* 6 (1) : 23-40.

Stahl, C. W (1999) International Labour Migration in East Asia: Trends and Policy issues. (Proceeding Paper Presented at the International Symposium on “New Trends in Migration in the Asia Pacific and Consequences for Japan.” September 23-26, 1999, Tokyo)